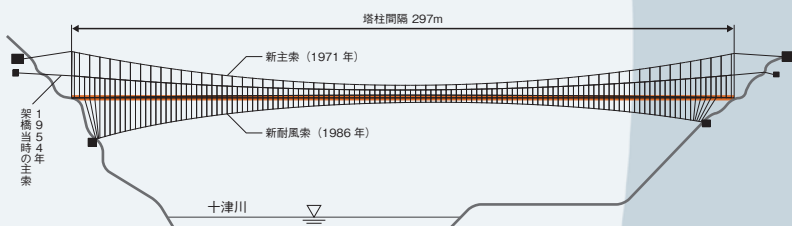


日本一長い生活用つり橋



学生が行く今月の
土木日本一

住民の生活を支え続けて60年



(提供：十津川村役場)

DATA: 11

谷瀬のつり橋

完成：1954年

大きさ：長さ297m、高さ54m

日本一：鉄線を用いた日本一長いつり橋

建設費用：当時の金額で約800万円
(谷瀬地区の住民が負担)

降りしきる雨の中、日本一怖いつり橋へ
十津川村へ向かう途中、ポツポツと雨が降ってきた。嫌な予感がしている、案の定、雨は激しさを増した。激しい雨に打たれながら険しい山道を車で走ること数十分、雨と霧の中につつすらとつり橋が見えてきた。
十津川村役場の鎌倉さんと合流し、早速谷瀬のつり橋へと向か



写真1 晴れた日の谷瀬のつり橋 (提供：十津川村役場)

日本一つり橋の多い村として知られる奈良県十津川村には、60基を超える大小さまざまなつり橋が架かっており、その中でも「谷瀬のつり橋」は、長さ297m、高さ54mの日本一長い生活用つり橋として有名である。学生班は、谷瀬のつり橋が、同時に「日本一怖いつり橋」でもあるとの噂を聞きつけた。日本一のつり橋は日本一怖いのか？ その謎を解明すべく、実際に谷瀬のつり橋を渡ってみることにした。事前に調査を進めると、谷瀬のつり橋は地元の人びとが私財を投じて、建設費用を負担したことが判明した。住民が自分たちで費用を出してまで必要な橋とはどんな橋なのだろうか。早速われわれは十津川村へと向かった。

うと、霧と雨のせいで、つり橋はまるで谷の間に浮いているように見える。「私は車で対岸に先回りをしていきますから、谷瀬のつり橋を渡ってみてはいかがですか？」という鎌倉さんのご提案に、「まだ心の準備が…」などと言えはるはずもなく、恐る恐る足を踏み出した。
橋が完成してから60年近く経過しており、まさか今日壊れることはないかと頭ではわかっていても、いざ橋を目の前にすると、その長さや高さには思わず腰が引けてしまう。橋桁は立派な舗装がされているはずもなく、2mほどの板を何枚も敷き詰めただけである。板の横には金網が張られているものの、



写真2 歩行部に敷かれた板



写真3 雨にもかかわらず訪れる観光客

もし踏み外したら自分の全体重を支えてくれるのか、もう少し痩せておくべきだったなどさまざまな思いが頭をよぎる。雨で滑りやすくなっている橋を、一歩一歩慎重に進んでいく。踏む位置によっては木が「みじ」と音を立て、そのたびにヒヤッとさせられる。しかし、それさえ慣れてしまえばさすがは土木構造物、なかなかの安定感がある。意外と大丈夫だなと思いつつ、どん歩みを進めていく。ところが、この時点で油断してはいけなかった。橋の中央に差し掛かるにつれて、しだいに左右の揺れが大きくなるのではない。真下には十津川が普段より水かさを増した状態で待ち構えている。中央まで来てしまつたからには渡るしかない。できるだけ下を見ないようにしながら、やつこの思いで対岸に到着し



写真4 野猿体験

た。先回りして待つてくださっていた鎌倉さんに、「とても怖かつたです」と素直な感想を述べると、ときどきあまりの怖さから橋の中央で動けなくなつてしまつて観光客がいることを知らされる。さらに、続げざまに、「今では下のキャンプ場に物が落ちないように金網やネットがしてありますが、私が子ども頃はそんな物なかつたんですよ。通学途中に足がはまつたり、靴が下に落ちたり」と話はよく聞きました」との衝撃的なお話。ああ、取材が20年前でなくてよかつたと胸をなでおろすわれわれであった。

つり橋に込められた住民の思い

つり橋がなかつた頃、谷瀬地区の人びとは川に丸木橋を架けて

川を渡っていた。しかし、大雨が降つて洪水になるたびに橋が流され、大変な苦勞をされていた。そこで、谷瀬地区の人びとは、洪水に負けない立派な橋を建設することにした。

谷瀬のつり橋は、1954(昭和29)年に、当時の金額でおよそ800万円もの資金を投じて建設された生活用つり橋である。学校の先生の初任給が7,800円という時代に、谷瀬地区の人びとが自分たちで資金を出し合つたというから驚きである。単純計算で1戸当たり20万円のお金を、谷瀬の人びとはどのようにして工面したのであろうか。その答えは、村の財産であつた木材を売ることであつた。谷瀬には松林が広く分布しており、その松を売ることでつり橋建設の費用にした。そうである。現在、谷瀬地区の自治会長を務める北谷さんは、「橋の取りつけ位置など、もめることもたくさんあつたけど、村人全員で資金を集め、橋をつくり上げた。だから今でも谷瀬の人たちはみんなで助け合つて暮らしているんだよ」と、当時を振り返りながら話してくれた。谷瀬のつり橋は、人びとの心もつないでいるのだ。

建設当初、谷瀬のつり橋は設計

活荷重が牛1頭分(375kg)、塔もなくケーブルを両側の岩盤に直接固定する非常にシンプルな構造であつた。1968(昭和43)年に村道となり、村の管理下に置かれた後に、塔を建てて新たなケーブルを増設したり、耐風索(つり橋の横揺れを防ぐロープ)を張り替えたりするなどして、現在に至っている。洪水に負けない橋がほしいという願いが、現在の立派な橋の礎となつているのだ。完成から60年近くが経過し、谷瀬のつり橋は業者による年に数回の定期点検だけでなく、村人による日々の点検によって大切に守られている。

人びとの生活を支える谷瀬のつり橋

近年、車が普及

し、周辺に立派な橋がつくられたことなどから、つり橋の役割が変化してきた。谷瀬のつり橋は、われわれの生活を支える橋として、なくてはならない橋です。地元住民の利用頻度

Column

猿のように川を渡る!?

つり橋がなかつた時代、十津川村の人びとは、「野猿」(写真4)と呼ばれる非常にユニークな方法で川を渡っていた。野猿は人力で進むロープウェイのような乗り物で、十津川村特有の交通手段である。猿が木のつるを伝って行く様子に似ていることからこの名前が付けられてそうだ。今では実際に使われているものはないそうだが、十津川の人たちはさまざまな工夫を凝らし、不便さを解消していたのだ。

学生編集委員 澤村康生

澁谷 容子

は少なくなりりましたが、今は観光の中心としてこの村の生活を支えています」と北谷さん。この言葉の通り、取材当日はあいにくの雨だったにもかかわらず、団体の観光客がやはり恐る恐る渡つていた。谷瀬のつり橋は、十津川村の観光スポットとして、村と観光客をつないでいるのだ。GWや夏休みには、多い日で1日に4,500人の観光客が谷瀬のつり橋を目当てに十津川村を訪れるそうである。役割の形を変えながらも、谷瀬のつり橋は十津川村の人びとの生活を支えているのだ。